





# ごん狐

## 新美南吉

# ごん狐

## 新美南吉

### ANTENNA HOUSE

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声《はなしごえ》も近くなりました。葬列は墓地へはいつて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌《いはい》をささげています。いつもは、赤いさつま芋《いも》みたいな元気の良い顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母《かあ》だ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床《とこ》について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり【#「はりきり」に傍点】網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。



だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおつ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

「うわアぬ  
すと狐め」  
と、どなり  
たてまし  
た。ごん  
は、びっく  
りしてとび  
あがりまし  
た。うなぎ  
をふりすて  
てにげよう  
としました  
が、うなぎ

### ANTENNA HOUSE

ほら穴の近くの、はん【#「はん」に傍点】の木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやがて来ますと、いつの間《ま》にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢《おおぜい》の人があつまっています

# ごん狐

## 新美南吉



### ANTENNA HOUSE

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しょにかえっていきます。ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「そうかなあ」  
「そうだとち。だから、まいにち神さまにおれを言うがいよ」  
「うん」  
ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはおれをいわないで、神さまにおれをいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。





このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

# ごん狐

## 新美南吉

### ANTENNA HOUSE

これは、私《わたし》が小さいときに、村の茂平《もへい》というおじいさんから聞いたお話です。

ふと眠ると、川の中に人がいて、何かを食べています。人は、見づからなにもないのに、そのこと喜ぶようにうきまきまきして、そこからうきまきまきしてました。

「兵十《ひょうじゅう》だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いものをまき上げて、腰のところにまで水にひたしながら、魚をとる、はりきり「#「はりきり」に傍点」といって、網をゆすぶっていました。はおまきをした顔の横ごちのように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒字《ほくろ》みたいにくぼりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり「#「はりきり」に傍点」網の一本うしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれの葉や、ごちやごちやは、いっていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎ「#「うなぎ」に傍点」の腹や、大きなきす「#「きす」に傍点」の腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼ

むかしは、私たちの村のちかくの、中山《ななかやま》とていふところに小さなお城が、あつて、中山をまわすおとこのさまが、おられたのです。その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐《ごんこ》」とていふ狐がいました。ごん狐は、一人《ひとり》のぼろぼろの小狐で、「ごん狐」に傍点の「ごん狐」のぼろぼろの森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも厚くも、あたりの村へ出てきて、いたずらはかりました。はだけへ入って芋をほりちりちり、菜種《なたね》が「#「がら」に傍点」の、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家《ひやくしやうや》の裏手につるしてあるとんがりしをむじりつって、いったり、いらないことをしました。

**「ごん、お前《まい》だったのか。いつも栗をくれたのは」**  
**ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。**

兵十がいなくなると、ごんは、びよーと草の中からびよーと出て、びくの中へかかけつけました。ちよーと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中を魚をつかみ出して、はりきり「#「はりきり」に傍点」網のかかっているところより下半《しもて》の川の中をながけて、ほんほんなげこみました。どの魚も、「ごん」とていふ言葉を立てながら、じつと水の中をめぐりこみました。

雨があがると、ごんは、ぼつと穴からはい出ました。空はからりと晴れていて、百舌鳥《もず》の音がきんきん、ひびいていました。ごんは、村の小川《おがわ》の堤《つつまみ》まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少《すくな》いのですが、三日もの雨で、水が、どっとまわりました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩《はぎ》の株が、黄いろくにごった水に横たおしになって、ちまれています。ごんは川下《かわしも》の古ハト《ふるはと》ぬかるみから歩いていき